

君のすべては僕のもの

『お姫様になりたい。そしていつか王子様に迎えにきてほしい』  
それは、女の子なら誰もが一度は夢見ること。

私、やないゆいな矢内結愛にとっても「お姫様」はあじが憧れで。

私にとつての「王子様」はしゅん駿くん。  
「いつか」は二十歳。

『二十歳だ。二十歳になっても結愛の気持ちが変わらなかつたら結婚しよう』

十六歳の時、駿くんに言われた言葉。

それを宝物のようにずっと抱えてきた。

私はあと一か月半で二十歳になる。

私が五歳、駿くんが十五歳で婚約してから十五年――

中学卒業と同時に留学し、ずっと海外で生活していた駿くんが、ようやく日本に帰ってくる。

## プロローグ

私は幼い頃、幼稚園が終わると母の親友の家である「高遠家」のお屋敷に預けられていた。専業主婦だった母が義理の祖母の介護に携わることになったせいだ。それでも私は寂しくなかなかった。

広い敷地に建つ大きな洋風のお屋敷は、お城みたいで素敵だったし、大奥様をはじめ、高遠家に関わるみんなが私をかわいがってくれたから。

なにより、ここにいれば王子様に会える。

高遠家の一人息子である高遠駿くん。彼は私の上の兄である颯真くんと同じ年で、私より十歳年上だ。

さらさらの黒い髪、いつも優しく見守ってくれる眼差し、そして私の名前を呼んでくれる穏やかで甘い声。

テレビに出てくる芸能人に負けないくらいかつこよくて、絵本の中の王子様のような存在だった。その日、私はお手伝いの清さんに見守られながら、高遠家のお屋敷で遊んでいた。

五歳の誕生日プレゼントにもらった、綺麗なドレスを着たお姫様のお人形。その髪をブラシで梳いていると、颯真くんがやってきた。

「結愛……結愛の夢はお姫様になることだよな？」

「うん！ お姫様になりたい！」

私は、綺麗なドレスを着たお人形を颯真くんに見せた。

「お姫様には王子様が必要だろう？」

「王子様……」

母が寝る前に読んでくれるお姫様の絵本には、王子様が必ず出てくる。

お姫様の隣には王子様がいるものだ。

「じゃあ、颯真くんが王子様になってくれる？」

王子様がいれば、私もお姫様になれる。だったら颯真くんが王子様になってくれればいい。私をかわいがって、遊んでくれるお兄ちゃんだもの。

期待を込めてお願いしたのに「俺と和真は結愛のお兄ちゃんだから王子様にはなれないんだ」と颯真くんは言う。そして少し寂しそうに笑い、私の頭に手を伸ばした。和真くんというのは、下のお兄ちゃんだ。

「でも駿なら結愛の王子様になれる」

私は颯真くんのうしろに立つ駿くんを見上げた。

「駿くん！ 駿くんが結愛の王子様になってくれるの？」

大好きな駿くんが私の王子様になってくれれば、私はお姫様になれる。

問いかけに対して、駿くんが私の目の前で膝をついて、いつものように腕を広げてくれた。私は

すかさず飛び込んでいく。お日様みたいな暖かな匂いがして、ほっと安心できる腕。

駿くんは、私をふんわりとお姫様抱っこして、優しくほほ笑んでくれた。

「結愛ちゃん、僕が王子様になってもいい？」

「私は駿くんのお姫様になれる？ 駿くんは本当に私の王子様になってくれるの？」

「結愛ちゃんがよければ、喜んで」

私は駿くんの首のうしろに手をまわして「王子様になって、駿くん！」と言った。

この時、いつも優しい両親と高遠のおじさまたちが、複雑な表情で私たちを見守っていたことなど気付かずに。

これにより、駿くんがなにを犠牲にしたのかも気付かずに。

矢内結愛、五歳。

高遠駿、十五歳。

両家の間で、ひっそりと約束が交わされ、私は駿くんの婚約者になった。

婚約を交わしたものの駿くんは、中学卒業と同時に留学し、高校、大学、大学院と海外にいた。

私は小学校に入学すると、長期休みのたびに駿くんの留学先を訪れては、サマースクールに参加したり短期留学をしたりして、駿くんと過ごした。

英語を頑張って覚えて、慣れない海外生活に挑戦できたのも、駿くんに会いたい一心から。けれど、成長するにつれてわかった気になっていた。

駿くんが海外留学したのは、高遠グループの御曹司としての勉強のためだということ。

私たちの婚約は、親友同士である母たちの「お互い子どもが生まれて異性だったら結婚させたいね」という夢見がちな願いからだだったということが。

駿くんが私と婚約した意味と、婚約が母たちの身勝手な夢だけではなかったと知ったのは十六歳の時。

私が矢内家の養女で……私の立場を守るために、駿くんは婚約してくれたのだ。

皮肉にも自分がお姫様になれる立場ではないと知ると同時に、私は駿くんに恋をした。

## 第一章 二十歳の約束

「大丈夫、だよな？」

私は姿見に、全身を映してくりりとまわった。

オフホワイトの七分袖のワンピースは、襟元と裾に紺色のラインが入って甘さを抑えている。染めたこともなければ、パーマをかけたこともないまっすぐな髪は、脇の下のラインをキープ中。

高校を卒業してから覚えたメイクはナチュラルに、唇にだけ薄桃色のグロスをのせた。

三月に竣工したばかりの新居は、独特の匂いがする。

無垢の木の床に漆喰の白い壁。吹き抜けの天窓から降り注ぐのは、春らしい柔らかな光。

リビングダイニングの家具は、まだ少し余所者の表情をしている。

冷蔵庫の中には、温めればすぐに食べられる和食のおかずを準備した。

駿くんの書斎となる部屋は、残念ながらもまだ段ボールで埋め尽くされているけれど、寝室だけは綺麗に整えた。これで、時差ボケで疲れていても体を休められるはず。

ようやく日本に帰ってくる主を、この新居も私もずっと待っていた。

五歳と十五歳で交わした婚約が、私にとって大切な約束に変わったのは十六歳の時。

『二十歳だ。二十歳になっても結愛の気持ちが変わらなかつたら結婚しよう』

矢内家の養女だと知って、動揺して泣きじゃくっていた私に、駿くんはそう言った。

駿くんはずっと私の王子様で、憧れで、大好きで。

けれど、幼い頃の私にはまだその感情が恋かどうかなんてわからなかった。

十六歳のあの日から、私は駿くんを一人の男の人として意識して、もくもく広がる雲みたいに恋心をふくらませていった。

でも、ふくらんでいく私の恋心とは裏腹に、駿くんはなかなか日本に帰ってこなくて、私も高校生になると忙しくて、彼のところに遊びに行くことができなくなった。

インターネット電話やSNSで頻りにやり取りはしていても、会えない日々は寂しい。

駿くんは本当なら、私の高校卒業と同時に帰国する予定だった。けれど、仕事の関係でどうしても一年延期せざるを得なくなったのだ。

それを知った時、私は不安に襲われた。私が二十歳になるまで待つって言いながら、本当は私から婚約解消を言い出すのを待っているんじゃないか、と思って。

帰国延期が決まった時、私は「本当は日本に帰ってくるつもりなんてないんでしょ！」と駿くんに怒鳴った。

それから「駿くんが帰ってこないなら、私が駿くんのところへ行く！」とぐずぐず泣いた。すると駿くんは「必ず帰ってくるから、結愛に新居を任せるよ」と言ってくれた。そうして建てたのが

この家だ。

高遠家のお屋敷の敷地内に建てた新居には、駿くんの意見を聞きながらも、私の夢を盛大に詰め込んだ。

駿くんが帰ってくるのを信じて、二人で一緒に暮らせる日を夢見て。

中高一貫のお嬢さま学校を卒業した後、私は高遠家のお屋敷で働きながら、新居の出来を見守り、彼の帰国を待っていた。

もうすぐ、駿くんが帰ってくる。



矢内家の養女だと、私が知ったのは十六歳の夏。

私はその年の夏休みに、父方の祖母の七回忌ななかいきに出席していた。

「高遠との婚約なんて、口先だけなんじゃないの？」

法事と会食を終えた雑然とした雰囲気の中、親族がそこかしこで会話している。私はお手洗いにいく途中で聞こえてきた「高遠」という言葉に思わず立ち止まり、耳を澄ました。

「あの子も十六歳になったんでしょ？ 結婚できる年齢になったのに具体的な話が出ないのは、やっぱり口約束だけで、なんの確約もとれていないからじゃないの？」

「高遠と繋つながりもてるなら、つてことで正式に引き取って今後も育てることを認めたのに……どこまでも役に立たないわね」

「あんな子引き取らなきゃよかったのよ。あの女の弟と、どこの馬の骨ともわからない女との間にできた子どもなんか！」

高遠、婚約、十六歳、どの言葉も私にあてはまるものだった。

『結愛ちゃんって、お兄さんたちと年が離れているのね』

兄がいると言うと同級生たちは驚いていた。

『似ていないね』

そう言われることも多かった。

私はその場から抜け出して、タクシーで高遠家に乗り付け、その時たまたま帰国していた駿くんに会いに行った。

両親にも兄たちにも真実を問いただすことはできない。

駿くんが日本にいてよかった。

でなければきっと私は夏休みをいいことに、駿くんのいる外国まで向かったに違いない。

日曜日でお屋敷にいた駿くんは、仕事の時とは違う普段着姿だった。

ジーンズに貝ボタンの並んだ明るいグレーのポロシャツ。

制服姿だった私の突然の訪問に驚きながら、駿くんはいつもと同じ優しい笑みを浮かべる。

そんな彼に向かって、私は言った。

「十六歳になったよ。もう結婚できる年だよ。なのにどうして駿くんは結婚の話を進めないの？私がお父さんとお母さんの実の娘じゃないから？」

言葉にして初めて、涙がぼろぼろこぼれた。

「なんで？ どうして？」、そんな言葉ばかりを口走った。

三歳の七五三から始まった家族写真。

幼稚園の入園式、小学校の入学式、颯真くんや和真くんの成人式でも節目ごとに家族みんなで写真撮ってきた。家族の証あかしのようなそれらがガラスが割れてバラバラになるように飛び散っていく。「結愛……落ち着いて。矢内のおじさんたちに確認する。結愛には今、おいしいケーキと紅茶を準備させるから。ここで待っていて」

駿くんの部屋の応接スペースで私はソファにもたれかかって泣いていた。

両親の子どもではなかった、兄たちの妹ではなかった。

一瞬で自分が軽い存在になって、紐ひもの切れた風船のような頼りない存在になった気がする。

駿くんは部屋に戻ってきて、まずあたためたタオルを渡してくれた。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔をふいても、また出てきてしまうから顔を押しさえた。

テーブルのほうからかちやかちやとケーキと紅茶が準備される音がする。

駿くんは私の隣に座ると、そっと肩を抱き寄せてくれた。いつも安心できるその腕に私は甘える。「矢内では一切話題にしないように厳命されていたはずだけど、今のご当主に代わってから拘束力こうそくりきが薄れたみたいだね。おじさんたちには一応許可を得たから、僕から説明する。なにが聞きたい？」

「私のお父さんとお母さんって誰？」

「結愛のお父さんは……矢内のおばさんの弟だ。結愛は姪めいで、颯真たちとは従兄弟いとこになる。結愛が二歳の時、家族の乗った車が事故にあった。結愛だけが助かったけど、君はその時の事故のショックで記憶を失ったらしい。他に身寄りがなかったから、姉であるおばさんが結愛を引き取った。君が二十歳になったら、君のご両親が真実を知らせるつもりだったんだ」

「お母さんは？」

「それは、ごめん。結愛のお父さんが愛した女性としかわからない。その女性も身寄りがなくて、事情があつて素性すじょうを隠していたようだ。だから結愛のお父さんも結婚してからは居場所を一切知らせてこなかった。毎回、消印は違うけれど、季節ごとに写真が送られてきていたらしいよ。結愛の小さな頃の写真があるのはそのおかげだった。事故が起きた時おばさんのところに電話が来たのは、お父さんがもしもの時に備えておばさんの連絡先を書き残していたからだ」

実の父は母の弟だった人。実の母は事情を抱えた謎多き女性。

親戚たちのどこの馬の骨ともわからない女という発言は、そこからきていたのだ。

けれど、ささやかでも矢内家と血の繋つながりがあつて私はほっとしていた。

母は伯母おばで、兄たちは従兄弟いとこになるけれど、それでも誰の子かわからない他人であるよりずっとマシに思えた。

駿くんの手が私の肩を優しくなでる。

実の娘でなかったショックは大きくて、それでも姪めいである事実じじつに救われて、そして家族は確かに

私を大事に育ててくれたことを思い出す。

私は体を起こして駿くんのパロシヤツを掴む。

「駿くんは……知っていたんだよね？」

「知っていた。事故の連絡がきておじさんたちは病院にかけつけた。その間、颯真たちはうちに預けられていたし、それは結愛が退院するまで続いたから。退院してからも、しばらくの間みんなうちで生活していたんだ」

昔からなにかあれば、矢内の親族ではなく高遠の家を頼りにしていた。

母方の実家だと思つて過ごせばいいと、清さんたちには言われていて、私は孫のようにかわいがられた。

そんな幼稚園の頃の記憶が、ぼんやりとある。

だから私は駿くんもお兄ちゃんだと思つていた頃があったし、高遠のおじさんとおばさんのことも父と母のように慕っていた。

「私を……引き取るのは反対だったって……聞いた」

「そんなことまで話していたのか」

駿くんはあきれたように言つて「再度厳命したほうがいいな」と呟く。

『高遠と繋がりがもてるなら、つてことで正式に引き取つて今後も育てることを決めたのに……』  
親戚たちは、そうも言つていた。

「私に事情があつたから……駿くんは私と婚約したの？」

母親たちの身勝手な願望じゃなかった。私たちの婚約には、もつと切実な事情が隠されていた。五歳と十五歳で婚約を交わすという不自然さに、私はいつからか目を背けていたのかもしれない。「結愛」

「そのためだけの婚約で……本当は結婚する気なんかない？ 私は十六歳になつて、もう結婚できる年になつたのに、なんにも決まつていないのは口先だけの約束だったから？」

「結愛、落ち着いて……」

「そう、だよ、私たち十歳も違うんだもの。駿くんからいつ婚約解消されるかつてずっと不安だった。でも駿くんは言わないから……大人になれば、このまま結婚できるんじゃないかって。駿くんは待つてくれているんじゃないかって」

「そうだよ、結愛。僕は待つている。君が大人になるまで僕は待つ」

自分がなにを言つているのか、もうわからなかった。

実の娘でなかつたことのショックと、駿くんとの婚約の本当の理由に気付いて混乱していた。

私たちの関係は、仲のいい兄妹のような距離から変化していかない。

本当は駿くんにとって最初から、私は婚約対象になるはずのない存在だった？

駿くんは私のために犠牲になつたの？

婚約を解消しなかつたのは私の立場を守るためだけで、そこに彼の意思はまったくなかつた？

「結婚……する気なんてなくて。私のために駿くんは犠牲になつただけ？」

ぼろぼろ、ぼろぼろと見開いた目から涙がこぼれ落ちていく。

私は家族の一員ではなくて、婚約は立場を守るためだけのもの？

「結愛！ 僕は犠牲ぎせいになつたわけじゃない！」

「嘘っ!! 結婚する気があるなら、どうして私を恋人にしてくれないの！ 私がまだ子どもだから？ 高校生だから？」

私の肩を抱き寄せようとする駿くんの手を振り払う。

「それとも、矢内の実の娘じゃないから？」

私の言葉はそこで途切れた。

駿くんの唇が私の唇に触れて、それ以上なにか言うのを阻はばんだから。

初めて触れる他者の唇に頭が真つ白になって、目の前の駿くんが一瞬、誰だかわからなくなる。

「結愛……君はまだ結婚の意味をわかっていない。僕と結婚するってことは僕とキスをするってことだ、その先にも進むってことだ。それがどういふことかわかるか？」

怒りという立ちが混じつたような静かな口調のあと、ふたたび私の口は塞ふさがれた。

強く押し付けられた唇はやわらかい。そんなことを考えていた直後、するりと入り込んできた舌に私は驚く。

そんなキスがあることを知識としては知っていた。でも、現実に自分の口内に他人の舌が入り込む感触は想像したこともなかった。

私を抱きしめているのは、いつもは安心できるはずの腕。

けれど、今はその大きさも強さも私を混乱させ、わずかな恐怖を生み出した。

どうやって息をすればいいのかわからなくて、ただ駿くんの舌に翻弄ほんろうされる。なにが自分の身に起こっているのか把握はあくできない。

家族のようで兄のようで一番信頼していた彼が、男の人だと意識した瞬間。

「やっ！ やだっ、駿くん、嫌っ！」

私が駿くんを怖いと感じるなんて、初めてのことだった。

「怖がらせてごめん。でもわかっただろう？ 結愛が今、僕に抱いだいている気持ちは思慕しほや憧れあこがではない。結愛の気持ちがそうである限り、僕も君をそういう対象として見るわけにはいかない。結愛が僕を一人の男として見てくれるようになったら……僕もきちんと向き合う。結愛はまだこれからたくさんの人と出会う。世界が広がっていく。今は恋がわからなくても、僕以外の男に恋する可能性だつてある。僕はそういう君の可能性をつぶしたくはない」

涙でぼやけている視界の中に、駿くんの真摯しんしな眼差まなざしがあった。それは、今までと同じ私の知っている駿くんの姿。

でも唇には、激しい熱の余韻よゐんが残っている。

「二十歳だ、結愛。二十歳になるまでに他に好きな男ができたなら、僕たちの婚約は解消しよう。僕を恋愛対象として見られない時も同じだ。結愛の僕への気持ちが憧れあこがから恋心になり、それが二十歳になっても変わらなかつたら、その時は結婚しよう」

「その間に駿くんに好きな人ができたら？ それでも解消するの？」

「僕から解消することはない。だから結愛は……あと四年、自由にしていいた。僕じゃない男を好きになってもいい」

「私は駿くんが好き」

そう、私は駿くんが好きだ。それは幼い頃から変わらない。でも駿くんは、寂しそうに私を見て言った。

「うん、知っている」

「こういう好きじゃ、だめなの？」

「……二十歳になっても変わらなかったら、その時はね」

だめとも、いいとも言わずに、駿くんは「二十歳」と期限を区切る。

「婚約者」とは名ばかりで、昔からよく知っていて、ずっと仲良くしてくれる憧れの兄のような存在でしかなかった駿くん。私は彼を、この時初めて一人の男性として意識した。

憧れと恋の違いもわからずにいた私が、恋に囚われ始めた日。

そして「二十歳」という約束に縛りつき始めた日。



お屋敷の裏口から続く小道を抜けると、駿くんは立ち止まって新居を見上げた。

「凶面や画像では見ていたけど……実物はやっぱり違うな」

駿くんが感嘆の言葉をもらす。

本当は空港まで迎えに行きたかったのに、そのまま一度会社に挨拶に向かうと言われてしまったので、お屋敷に戻ってくるのを待っていた。

駿くんの帰りを待っていたのは私だけじゃない。

お屋敷で働く人たちも、心待ちにしていたのだ。みんなで並んで出迎える。

そうしてひとしきり話したあと、やっと私は新居を案内することができた。

設計士さんにお願いで建てた家は、伝統的な洋風建築のお屋敷とは違う、モダンな佇まいだ。

表から見える場所には細長い窓がなく、シャープな外観をしている。直線的なデザインをやわらげるために、白い壁に、一部こげ茶の板や石のタイルを張ってぬくもりを出した。

駿くんは家を建てることと決めた時、ほとんどのことを私に任せてくれた。

最初は私が考えていいのかと躊躇ったけれど、駿くんは「結愛も一緒に住む予定の家だろう？」と私に未来を示唆してくれた。

帰国が延期になって、「日本に帰る気がないんだ！」って泣いた私を宥める意味もあったのかも  
しれない。

家づくりはいろんなことを決めていかなければならない。

その都度駿くんに相談して、密に話して、離れている寂しさを埋めていった。

私は駿くんの家づくりを任されて、その使命のおかげで帰国が延期になった一年を乗り越えられたところがある。

「駿くん、入って」

私はドキドキしながら、木目調のドアを開けた。

家に入る駿くんの背中を見て、なんだか泣きたくなる。

やっと、やっと駿くんが日本に帰ってきた。

今までは帰国しても、一週間も経たないうちに、すぐに海外へ戻っていった。もうそんな彼を見送る必要もない。

この空間に駿くんがいて、そしてこれからはずっとこの家で過ごしていくのだと思うと、胸がいつぱいになってくる。

玄関の高い天井を見上げる駿くんの横顔に、帰国したばかりの疲れは見えない。

お正月に会った時より髪が少し伸びただろうか。年を重ねても駿くんはあまり変わらないように見える。

いつまでも、私にとっては憧れの王子様のまま。

駿くんは一通り玄関を見回したあと、私に視線を向けた。

「結愛、ただいま」

「うん、おかえりなさい」

日本に帰ってくるたびに繰り返した言葉。

同じ言葉のはずなのに、違う気がするのとはなんでだろう。

物心ついた頃から、海外留学していた駿くんとは、離れていることのほうが多かった。それなの

に、駿くんに恋をして、私の中で婚約の意味合いが変わって、離れていることがだんだんつらくなったのだ。

でも、もう離れなくてすむ。

「やっと帰ってこられた」

ほっと安堵したような駿くんの声は、その言葉を深く実感しているように聞こえた。

「うん、やっと帰ってきてくれた」

「結愛、おいで」

「……………」

駿くんは変わらない。

私にとって、駿くんは十歳も年上で、気付いた時にはもう大人の男の人だった。

無邪気な子どもだった頃は、私は広げられたその腕に素直に身を委ねられたのに。

お姫様抱っこされるのが嬉しかったのに。

私はもう素直に腕に飛び込める、小さな女の子じゃない。

たとえ駿くんに……………いまだに子どもだと思われているとしても。

「駿くん……………私もう子どもじゃない」

もうすぐ二十歳になるよ。

気楽に腕を広げた駿くんへ抗議の意味も込めて、拗ねてみせる。

「子どもだなんて思っていないよ」

それでも、昔のように無邪気に抱き付くことはできない。

だって触れれば、私だけがドキドキしているのを見抜かれてしまう。

私だけが意識しているんだって思い知らされる。

「結愛、僕は日本に戻ってきた。こうして一緒に住むための家もできた。僕がいない間に……二十歳になるまでに、結愛はいつでも自由になった。猶予はあと少しだ、結愛」

「なんで、そんなこと言うの？」

駿くんが「結愛は自由だ」と言うたびに不安だった。

突き放されている気がしてしまうから。

「猶予なんていらぬ。私は早く駿くんと結婚したいのに……」

このまま帰国しなかったらどうしようって、心配だった。それに、二十歳を過ぎたら過ぎたで、また別の言い訳をされて結婚を先延ばしにされたらどうしようって不安だったのに。

今帰ってきたばかりの駿くんが、またどこか遠くへ行きそうに思えて、帰ってきた実感がなくて絶りつきたくなる。

「猶予はいらぬ？」

駿くんがわずかに目を細めて、低くかすれた声を吐き出した。

いつも優しく私を見つめてくれていた眼差しが、射るように貫く。

私にとって駿くんは小さな頃から誰よりもよく知っている人。

スーツ姿も、緩みなどひとつもないネクタイの結び目も、額にかかるまつぐな髪も、穏やかな

笑みを浮かべる口元も。

けれど、この瞬間、初めて私は駿くんが知らない男の人に見えた。

駿くんが私の腕を掴んで引き寄せた。いつもなら、ふわりとやわらかく背中まわされる腕が、今はきつく激しく私を抱きしめる。

それは家族のような、兄のような親しみのある抱擁とは違っていて、力強さとか、男っぽい香りとかを感じさせるものだった。

「しゅ、駿くん？」

「猶予はいらぬんだらう？ 結愛、ここでは僕たちは二人きりだ」

耳元に吹き込まれた声音は、聞いたこともない熱を孕んでいた。私の心臓は急激に音をたてて存在を主張する。

二人きりになることなんて、これまでだって何度となくあった。

腕を広げられれば、私は無邪気に飛びついていただけで、思えば駿くんからこうして手を伸ばされたことはあまりない。

ましてや、私の髪に指を絡めたり、首筋に鼻を押し付けたりするなんて。

混乱と緊張と羞恥で、私の心臓は口から飛び出そうなほどドキドキしている。キスで塞がれているわけでもないのに、息の仕方さえ忘れそうだ。

咄嗟に逃げ出そうと腕を動かすと、不意にこめかみに唇が押し当てられた。かするような軽いものではなく、強く長く感触を覚えさせるように。

「結愛、家の中を案内して」

やがて駿くんはするりと私から離れた。

私の混乱など放置して玄関を上がっていく。

「結愛」

名前を呼ばれて差し出された手に、反射的に指を伸ばした。

部屋の中なのに、なんで手を繋いでいるんだろう。

疑問を抱いても口にはできない。

駿くんとうとうして手を繋いだのは小学生以来だ。それに、こんなふうに指と指を絡めるような繋ぎ方はしたことがなかった。

「こっちがリビング、こっちがダイニングとキッチン」などとモデルルームの案内人のごとく説明しながらも、私は動揺しっぱなしだった。

この家に入ってから、駿くんの雰囲気が違う。

腕を伸ばしては「結愛、こっちはなに？」と収納の扉を指したりする。距離が近付くたびに、駿くんの体温とか匂いとかを感じて、私はただただ混乱していた。

「結愛の部屋はここ？」

「うん」

二階が上がって、ファミリースペースの向かいにある扉を開く。

壁の一面だけ淡い紫色の小花模様の入った壁紙を貼った部屋は、カーテンとベッドカバーも似た色合いとデザインにして、ヨーロッパと北歐風が混じり合ったような雰囲気だ。

窓辺にカウンターデスクと収納棚を備え付けたので、部屋にある家具はベッドだけ。

高校を卒業してから、私はお屋敷に住み込みで働いている。私の荷物はまだそこに置いたままだ。

この家に私の部屋も準備するように言われたけれど、一緒に暮らしているのか自信がなかったから「荷物はまだ入れてない？」

「うん。駿くんに聞いてからにしようと思って。あ、ここが駿くんの寝室」

駿くんの寝室の壁紙は一部が暗いグレー。ここにも大きなベッドが入っているだけだ。

駿くんは部屋に入ると、ベッドのスプリングの具合でも確かめるかのように、そこに腰をおろす。手を繋いだままの私は自然にその隣に座る形になった。

不意に「ここでは僕たちは二人きりだ」という駿くんの言葉が蘇る。

今までは帰国すると駿くんはお屋敷で過ごしていた。当然そこには、お屋敷の使用人たちがいて、二人きりになることはない。

思えば駿くんは、私が成長するにつれて二人きりになることを避けていた気もする。

ここは駿くんの寝室で、私たちは彼のベッドに並んで座っていて、この家には完全に私たち二人だけだ。

そう意識した途端、繋いでいた駿くんの手に力が加わった。

まるで私が逃げ出そうとしたことに気付いたみたい。

「結愛はどうしたい？」

「え？」

「二十歳になるまでは、はじめをつけてお屋敷にいる？ それとも今夜からここで暮らす？」

私は、駿くんがやっと日本に帰ってきたことと、一緒にいられることだけで嬉しいと思っていた。ここに二人で住むつもりで家づくりだとしてきた。

駿くんは私を見つめながら、ネクタイに手をかけてゆっくりと緩めた。

その仕草が色っぽくて、頬がかあつと熱くなる。

きつと今、私の顔は真っ赤になっている気がする。

「結愛、僕たちはずっと離れて暮らしていた。婚約は名ばかりで、顔は合わせていても、兄と妹のような関係でやってきた。でも、僕は君の兄ではないし、君は妹じゃない」

あたりまえのことを、あえて口にした駿くんには私は驚いていた。

「結愛……わかつている？」

私はいつのまにか口の中に溜まった唾液をこくと呑んだ。

まっすぐに私を見る駿くんの目から逃げ出したいのに、むしろひきつけられる。

「う、ん、駿くんは兄じゃないよ」

「僕を男として意識している？」

「しているよ！ 私は駿くんが好きだし、今だって……ドキドキしているもの」

「結愛。男のベッドでそんな無邪気なことを言うもんじゃない」

繋いでいた手が離れて、肩にまわったかと思ったら、背中がふわんとスプリングのきいたベッドに埋もれた。私の頭の横に駿くんが肘をつく。見上げた先にものすごく近付いた顔があった。

「駿、くん？」

「結愛には、僕が兄じゃないってことをわかつてもらわなきゃならない」

「わかつている、よ」

「そうかな？」

駿くんの大きな手が私の頬を包んだ。体重など一切かかかっていない。けれど、駿くんから発せられる強い威圧感で、身動きがとれない。

「二人きりだとわかつていて警戒心もなく、こうして押し倒されながら抵抗もしないのには？」

頬に触れた手がゆっくりと私の髪を梳く。そうしてまた頬から耳、首筋へと辿っていく。肌をかくする長い指先は、安堵よりも緊張を生み出す。

どくんどくと速くなる鼓動が耳に届いた。

二人きりの静かな部屋で聞こえるのは、自分の心臓の音と緊張で吐き出す息遣いだけ。

「結愛」

艶やかな熱のこもった声が目の前の唇からこぼれる。

同時に駿くんの親指が私の唇をゆっくりなぞった。

そこにいるのは、幼い頃から慕ってきた兄のような人じゃない。

怖い、そう感じた自分にびつくりした。

私の心中に気付いたように、駿くんもびくりと震え、そして目を細めて私を見下ろす。

この人は……誰？

こんな駿くんは、知らない。

よく知っているはずなのに、見知らぬ男の人に見えて体が勝手に固まる。

「結愛、僕にちゃんと恋をして。僕は君を一人の女性として見るし、君にも僕を男として意識してもらおう。そのうえで、君には答えを出してほしいんだ」

私は恋をしているよ、駿くんが好きだよ。

そう言いたいのに口にできない。

怖い、そう思う自分がいるのも事実だから。

「猶予がいらぬなら、今夜からここで僕と一緒に暮らそう」

につこりと駿くんが綺麗に笑う。

それはいつも目にしてきた穏やかな笑みとは違って、私はあやつられた人形のように、こくと頷くことしかできなかった。



「駿くん、この箱の中身はここに出していいの？」

「ああ、あとで整理するからとりあえずそうして」

駿くんは帰国後、土日合わせて五日間の休みを確保していた。その間にいろんな手続きをするために外出したり、荷物の整理をしたり、この家での生活基盤を整えている。

私もお屋敷の仕事はお休みして、駿くんの手伝いをした。

駿くんはお屋敷を任せていた執事の斉藤さんや家政婦の清さんに、今後の指示と私の処遇についても話す。

私はお屋敷内に自室を確保したまま、この家で一緒に駿くんとの生活を始めることになった。

『私が二十歳になるまで』という約束はどうやら彼らにも把握されていたらしく、最初は正式に結婚が決まる前から同居を始めることに難色を示していた。

けれど、駿くんは「このままの距離感で結愛が結婚に応じても意味がない」というようなことを語って説得した。

すると斉藤さんと清さんは顔を見合わせて、結果仕方なさそうに受け入れてくれたのだ。

「僕にちゃんと恋をして」と駿くんは言った。

私はちゃんと駿くんに恋をしている。

駿くんのことが好きだし、駿くんのそばにいたいし、結婚したいと思っている。

でも駿くんは首を横に振る。

まるで私の気持ちはまだ恋になっていないとでも言いたげだ。

私は納得できないけど。

段ボール箱から本や雑誌を取り出して、棚の空いた場所にしまった。

「結愛、これもそっちに」

と言つて、駿くんが同じ棚に雑誌を置いた時、指先が触れた。

咄嗟に手を引いてしまう。

バラバラと床に雑誌が落ちた。

「気まずい！」

一緒に暮らし始めて数日……駿くんの思惑通りなのかどうかかわからないけれど、私は彼との距離感がうまく掴めなくなっていた。

考えてみれば、こんなに長い時間一緒にいるのは初めてなのだ。

海外留学中も長期休みには遊びに行っていたし、帰国時にも会っていた。インターネット電話だつて頻繁にやっていた。

好きな人がやつと帰つてきて、さらに一緒に暮らせることになった。

喜んでいいはずなのに、私は気の休まる暇もなく、ずっと緊張した日々の中にある。

「結愛、大丈夫か？」

「大丈夫！」

分厚い海外雑誌は重みがあるから、足先にでも落ちていれば痛いだろう。幸いかすつた程度で済んだので、私はすぐに拾おうとかがんで手を伸ばした。

駿くんはその手を掴まれて、やつぱり引こうとしたのに今度はできなかった。

反射的に顔を上げると、私と同じように床にかがんだ駿くんが、じっと私を見る。

熱を秘めた眼差しは、帰国して時々見せるようになったもの。

「結愛。僕は意識してほしいんであつて、怯えさせたいわけじゃない」

「……怯えているわけじゃない」

駿くんは私の手首からそつとその手をずらして指を絡めてきた。

「そうかな？」

「駿くんがいつもと違うから、わからなくなつて……」

「違うだろうね、僕は結愛には兄のような振る舞いしかしてこなかった。男としての僕と一緒にいるのは怖い？」

数日一緒に暮らした中で、私は確かに混乱している。

昔と同じように優しく見守ってくれたり、同じ距離を保ったりすることもあれば、こんなふうに急激に踏み込んできたりもする。

「怖がらせないわけじゃないし、怯えられるのも嫌われるのも望んでない。結愛が落ち着かないなら、お屋敷に戻つても構わないよ」

「怖くないの、そうじゃなくて恥ずかしいだけなの。私の答えは決まっているし、気持ちだつて変わらない！ お屋敷には戻らない！」

絡み合った手を引かれ、私は駿くんの腕の中に収められた。

逃げ出したいと思うのは怖いからじゃない、恥ずかしいからだ。

「だったら慣れて」

「……………」

返事の代わりに、私は強張った体から少しずつ力を抜いた。今までは大好きだった腕の中。安心して身を委ねられた場所。でも今はドキドキのほうが勝って、落ち着かない。

男として意識させられて、私の中にあつた駿くんへの好意がどんな形を変えていく。あたりまえにあつた駿くんへの「好き」という気持ちは、憧れや思慕や親愛の延長線上にあつて、温かで優しいものだった。

けれど今は、戸惑いや緊張、そして羞恥が加わって、いろんな色がぐるぐる混ざり合っている感じだ。

これが「恋」なら、心臓がいくつあっても足りないと思う。

駿くんの手が私の頬を包んだ。

その合図のような仕草に、私は反射的に目を閉じる。

額にこめかみに頬にと降ってくる唇は、私の中に一つずつ熱を灯していく。

小さいけれど力強いその熱は、いずれ体中に広がっていきそうだ。

キスは唇以外の場所に降り注ぎ、手は腕や背中などに触れていく。

『駿くんこそ私のこと、どう思っているの!?』

そう、最初にこんな風に触れられた時に聞いた。

すると駿くんは、『二十歳になるまで僕は言葉にはしない。君に流されてほしくないから』と言った。

そうして私に触れながら『わからない?』と聞いてきた。

駿くんは言葉でないもので、私に気持ちを伝えてくる。

自分の勘違いだったら怖いと怯える時であれば、私はこのまま与えられる感情を信じていいのだと思える時もある。

私は駿くんに「怖いわけじゃない」と示すために、勇気を出して腕を伸ばして抱き付いた。胸に溢れる愛しさが駿くんに伝わればいいと願って。



一緒に暮らし始めて数週間、私は同居生活のリズムに少しずつ慣れ始めていた。

今日も朝からキッチンの白い天板の上に木のまな板を置いて、冷蔵庫から取り出した野菜を切り分ける。

前日の夜からひいた出汁を火にかけて、二合炊きの土鍋にも火をつけた。

炊飯器ではなく土鍋でご飯を炊くのは、少量でも早くおいしく炊けるから。

ぐつぐつ沸騰したらすぐに火を弱火にしないといけないから、音に気をつけて調理する。

昨夜のうちに下ごしらえを済ませていた、小松菜のお浸しを小鉢に盛る。今日のお魚は鱈の味噌

漬け。これはお屋敷で働く料理長からのお裾分け。焦げやすいので火加減は要注意だ。

木目のトレイをふたつ準備して、食べ物盛った器を並べているとダイニングの扉が開く。

「おはよう、結愛」

「おはよう、駿くん」

駿くんはまだセツトしておらずサラサラの髪のまま、薄い水色のシャツと淡いグレーのスラックス姿だ。

そうして私を背後から抱きしめてくる。

最初にこうされた時は、びっくりしてお料理の入った器をぶちまけてしまった。駿くんは笑いながら『毎朝するからすぐに慣れるよ』って言って一緒に片付けてくれた。

その時はまさか本当に毎朝こうされるとは思っていなかったけれど。

男としての駿くんを見せられた当初は「怖い」という気持ちがあった。駿くんが同じ空間にいることにドキドキすぎて、家事を言い訳に逃げ出した時もある。

駿くんは、私の様子をうかがいながら、慣れ親しんでいた雰囲気を出したり、あえて壊したりして、それを繰り返すことで私を慣れさせていった。

十歳も年上なんだから、私が彼の掌の上で転がされるのは仕方がないと思う。

駿くんの手がお腹にまわって、ぎゅっと抱きしめる。

背後から包むように抱きしめられると、駿くんの大きさがリアルに感じられる。それに、馴染んだ香りに安堵さえ覚え始めていた。

そうして顔を上げると、唇が降ってくる。

頬に額にこめかみに、唇以外の場所にはあますることなくキスされた。

『どうして唇にはしないの?』という問いは『歯止めが利かなくなるからだ』と無然として言われて以来、口にしていない。

十六歳で初めてした時は、怖いだけだったキス。

今は、どんなキスをしてくれるんだろうかと期待さえし始めている。そのたびに、私は駿くんが好きなんだと日々想いを実感する。

だって、駿くんを求めているから。

兄じゃない、男としての駿くんをもっと知りたいと思いつ始めているから。

「緊張しなくなったな……」

「駿くんが、慣れてって言った」

「緊張していたのもかわいかったし、こうして慣れてくれるのも嬉しいけど、結愛が二十歳になるまで耐えられるかな……」

眉間にしわを寄せて、駿くんが唸る。

「耐えなくてもいいよ」

私の誕生日はもうすぐだ。

そして私の答えはどうに決まっている。

こうして駿くんに触れられるたびに、本当は無理やりにでも奪ってくれればいいのと思っています

る。同居し始めて、駿くんは私の思考をそんなふうに変え替えた。

だからといって、私からキスをしかけたり、誘ったりなんてできないんだけど。

「結愛、朝から僕を暴走させるつもり？」

……しないくせに、という気持ちで見上げると、駿くんが私を小さく睨む。そして、はあっとため息をついてから、くすつと笑った。

「ここまで我慢したんだ。約束はきちんと守る。今日もうまそうだな、ごはんはしよるか？」

やっぱりあっさり私を手放して、駿くんはダイニングの椅子に座った。

駿くんは知らない。

こうして抱きしめられるたびに、私の体に変化していることを。

体の奥に甘いものが満ち始めていることを。

私もそれを誤魔化したくて、食事の準備にとりかかるところにした。

駿くんは必ず最初にお味噌汁を口にする。お味噌汁は、出汁をきかせればお味噌汁の量は少しでいい。出汁とお野菜のうまみとが溶けて、同じお味噌汁を使っても毎朝違う味になる。

海外生活が長かった駿くんは、その反動のように和食が好きだ。

そして、駿くんがお味噌汁を口にして、ふつと表情をゆるめたのを見て私は今日も上手にできたんだとほっとする。

それを確かめてから私も食事を口に運び始めた。

「今夜、夕食いらなんだっけ？」

「んー。結愛のごはんのほうがおいしいんだけど。残念ながら朝食が入っている」

「うん、わかった」

土鍋で炊いた炊き立てのごはんは、ふつくら艶々している。

口の中に入れると甘みがふわっと広がって、とてもおいしい。

鯖も焦げ付かずに味噌の味が染みているし、料理長にお礼を言わなきゃ。

「結愛……二十歳の誕生日だけど」

おもむろに切り出されて、私はお箸を置いて背筋を伸ばした。

「あ、うん」

知らず鼓動が大きくなってくる。

「二十歳だからみんなでお祝いしたいだろうけれど、僕と二人だけでいい？」

母からも、誕生日当日どうするつもりなのかという連絡がきていた。二十歳の誕生日は金曜日だから、家族でのお祝いは日曜日でも構わないわよ、と言ってくれたのは、この日が特別だと知っているからだ。

「駿くん、仕事は大丈夫なの？」

「結愛の大事な二十歳の誕生日だからね、昼間は仕事だけど夜はなにがあっても空ける」

「駿くんと二人がいい」

大切な、ずっと心待ちにしていた二十歳の誕生日。

特別な日はやっぱり駿くと二人きりがいい。

颯真くんたちは、いろいろ言ってくるかもしれないけど、そこはお母さんに任せよう。

「ああ、じゃあ、レストランを予約するから一緒に食事をしよう。そうだな、せっかくだからもつとかわいくしてもらおうか？ 今のままでも結愛はかわいいけど、誕生日だからお姫様みたいななるう？」

「もうお姫様って年じゃないよ」

「関係ない。結愛が僕のお姫様なのは変わらない」

甘さを感じる目をして言われて、私はうつむく。

駿くんのこんな言葉には慣れてきたつもりだけれど、やっぱり恥はずかしい。

「うん、ありがとう」

私がお姫様になれるかどうかはともかく、駿くんが王子様なのは確かだ。王子様の隣にいるのにふさわしい姿になれるなら、少しでもかわいくしてもらいたい。

「楽しみだな。じゃあ結愛、清さんにいろいろ頼んでおくから」

「うん」

二十歳まであと少し。

駿くん……私の答えは決まっているよ。

私が駿くんあきとにふさわしくないとしても……私は駿くんを諦めたりしないの。



駿くんが仕事に向かったあと、私はこの家での家事を済ませる。

そして、白いブラウスと黒いスカートに着替えるとお屋敷に向かった。お屋敷で働くのに制服はないけれど、トップスは白、ボトムスは黒と色だけ決まっている。

こうして着替えることで、私はお仕事モードに気持ちを切り替えた。

玄関わきの曲がりくねった小道を抜けると、高遠のお屋敷が見える。

海外建築の様式を取り入れた別荘風の大きな建物、それが高遠のお屋敷だ。

白い外壁に丸みを帯びた柱、深緑色の屋根、等間隔に並んだ白い窓枠は黒いアイアンの飾りがアクセントになっている。様々な種類の低木で区切られた先に広がるのは、芝生の裏庭。タイルデッキにはこげ茶色のガーデンチェアが並び、こちらからは見えないけれど奥にはプールもある。

ゆるやかな角度のスロープは高遠家自慢の洋風庭園に繋がっている。そして青々とした紅葉の木に隠れるようにしてお屋敷の裏口があった。

使用人専用の休憩室を抜けて厨房に入ると、料理長が忙しそうに動きつつも私に気付いてくれる。

「お疲れさまです」

「お疲れさま。今、碧が部屋の片付け中だ。それから今日はサロンがあるからな」

「はい、片付けに行ってきます」

厨房からお屋敷の中に入ると確かに玄関のほうから、サロンに来た女性たちの声が聞こえる。遭

遇しないように気をつけながら、臘脂の絨毯敷の廊下を足早に歩いた。二階への階段を上ると、半分開けられたこげ茶色の扉の向こうで碧さんがベッドのシーツをはがしていた。

「碧さん！ なにをすればいいですか？」

「じゃあ、バスルームのほうお願い」

碧さんは料理長の奥さんで、料理長や清さんのお手伝いを中心に、このお屋敷の家事全般をサポートしてくれている。

このお屋敷で働いている人は執事の斉藤さん、家政婦の清さん、料理長に、奥さんである碧さん、お屋敷のメンテナンスも請け負っている運転手さん、そして私の六人だ。

高遠のお屋敷は、二年前に大往生で亡くなるまで、駿くんの曾祖母である大奥様が管理していた。駿くんの祖父母は、大奥様が亡くなったのをきっかけに、駿くんの祖父さんに事業を譲り、山の奥に引っ込んでしまった。

ちなみに駿くんのご両親は仕事の関係で海外を転々とし続けている。駿くんのお父さんは高遠グループを統括する親会社の社長をしているのだ。いずれば、その地位を駿くんが継ぐことになっている。そして駿くんはこの家とは別に、自分の家を建てた。

高遠のお屋敷で働くみんなは、お屋敷に泊まりにくる来客をもてなすのが仕事だ。

この家がそういうふうに使われるようになってからの歴史は長い。ホテルがまだ少なかった時代、海外建築を取り入れ、別荘の機能も併せ持ったこのお屋敷は、人が集まるのに適していた。

自然とここで重要な話をすることも増え、いくつかの契約が交わされたこともあった。

多くの親族と一緒に住んでいたこともあったし、まったく関係のない人間を住まわせて、才能の支援をしたこともあったらしい。

私を引き取った直後、親戚でもない矢内の家族が一時期ここにお世話になることができたのも、そういう流れがあったためだった。

そして数年前までは、国内や海外の取引先の中でも特に重要な相手をもてなすために、このお屋敷は頻繁に利用されていた。

海外企業のトップなどは、日本に来る時にホテルに泊まるより、高遠家に泊まりたいと言うのだそうだ。今でも、長期の視察や、合同プロジェクトなどで日本に滞在が決まると、ここに滞在が可能かどうか聞かれる。

大奥様が亡くなつてからは、使用人の人数も減ったので、せいぜい一組か二組ぐらいのお客様しか受け入れていないけれど。

もともと、ここはホテルではない。

ホテルのようなサービスではなく、あくまでも高遠家の大切なお客様として、家族の一員のようないきいきとしたお世話をし、それがこの在り方。

だからお金もいたらない。

そういったことを了承する人たちだけが、このお屋敷にやってくる。

「お客様の予定はありますか？」

数日滞在していた海外の取引先の人は、今日帰国する。もしかしたら駿くんと一緒にお屋敷を出

たのかもしれない。

「駿さんが、あまり入れないようにしているみたいよ。しばらくは使わないかもね」

二年前、大奥様が亡くなって、このお屋敷を相続したのは駿くんだった。

それから彼はこのお屋敷の活用の方を試行錯誤している。

元々、大奥様が体調を崩し始めてからは、お客様を迎える頻度は減っていたけれど、駿くんが相続してからは特に減った。

その代わりにこのお屋敷の家政婦である清さんによる、サロンが開催されるようになった。

去年は試行的に開催していて頻度が少なかったけれど、駿くんが帰国してから徐々に増えている。

「その分サロンのご希望は増えているみたいだけど」

「そっかあ、清さんのお眼鏡にかなう人がどれぐらいいるんだろう」

いずれ、宿泊客は必要最低限になって、サロン開催にシフトしてしまうのかもしれない。

「ふふ、そうねえ。あ、でも結愛ちゃんのお友達のお真尋ちゃんだっけ？ 彼女は今日いらしている

はずよ。結愛ちゃんの休憩時間と都合が合えばお茶でもしたらどう？」

「真尋の予定が大丈夫で、清さんの許可が出たら、そうします」

私は碧さんと一緒に白い大きな布を、部屋の調度品にかけていく。しばらく使用しないので、埃がつかないようにするためだ。

少しずつお屋敷は変わっていく。

どんなふうに変化していくのか楽しみでもあり、寂しくもあつた。

休憩時間を迎えた私は、無事、清さんの許可も得て、真尋の待つティールームに向かった。

料理長が気を利かせて準備してくれたケーキとティーセットをワゴンで運んでいく。

裏庭の緑鮮やかな芝生と、その向こうに広がる洋風のお庭を一望できるティールームはテラスの横に設置されている。床から天井まであるアーチ状のガラス窓の向こうには、春バラが咲き誇っていた。ブドウのつるを模した足のデザインが特徴的なテーブルのまわりには、体を包み込むような一人がけのソファが四つ並んでいる。

あえて少し開けられていた扉をノックすると、大きな窓からお庭を眺めていた真尋が振り返った。

「結愛！」

「久しぶり、真尋」

「うわあっ、おいしそうなケーキ！」

「今日はテーブルコーディネートサロンのサロンだったんでしょ？ お昼もついていたなら、お腹いっぱいじゃない？」

「デザートは別腹ですよー」

私はわざとからかいながら白いクロスの上にティーセットをセッティングしていく。

小さなガラスの小瓶に挿しているのはお庭に咲いている薄いピンク色のバラの花。

それをテーブルの真ん中において、ケーキのお皿とティーカップ、カラフルな小さなお菓子のつた長方形の角皿を添える。

きらきらした目でそれを見ている真尋は本当に表情豊かだ。

高校の同級生だった真尋は、付属の女子大に進学した。今年になってから、長かった髪を切って、あごのラインに揃えてふわふわのパーマをかけている。二重のはっきりしたやや吊り目がちな目も合わさって、子猫みたいな雰囲気だ。

「今日大学は？」

「この曜日の講義、入れるのやめたの。せっかくサロンメンバーに入れてもらえたから、ここに通おうと思つて」

「ええ？ そこまでする？」

「するわよ！ 去年は日程が合わなくて断念したけど、今年は逆にサロンの日程に合わせることにしたので！ 高遠のお屋敷で開催されるサロンに通うつて、一種のステイタスみたいになっているんだから」

サロンが始まったのは昨年からだ。

私がお屋敷で働くことが決まって人手が増えたこと、宿泊のお客様を制限し始めたこともあって、このお屋敷の家事全般の責任者だった清さんが開催することになった。

昔からここに勤めている清さんには、私も小さな頃から面倒を見てもらつている。

母よりは年上だけとおばあちゃんというには若い清さんは、なんでもできる。

お茶、お花、着付けはもちろん、書道やフラワーアレンジメント、今日のテーブルコーディネーターや社交ダンスまで、それらを師範並みに会得している。

礼儀作法やマナー、言葉遣いなども完璧だし、教え方もとてもうまい。

だから清さんに教えてもらえるのは勉強になると思う。

「少人数制だし、清さんのお眼鏡にかなわないとためでしょう？ 高遠家の清さんは知る人ぞ知るつて方だから、彼女のお眼鏡にかなつたつてだけで、結婚話が持ち込まれるつて話なのよ」

確かに清さんはこのお屋敷で、長年お客様のおもてなしをしてきた人だから、一部の企業のトップの方たちはご存じだろう。清さんの人柄に惚れてこのお屋敷への滞在を希望する人もいたし、お客様にもとても信頼されている。

サロンを開催すると決まつた時、清さんが「誰でもは受け入れませんよ」と駿くんと言つているのを聞いて、成り立つんだらうかと心配していたんだけど、どうやら杞憂にすぎないようだ。

「それは……すごいね」

「結愛はわかつていないなあ。でもそれでいいんだよね」

真尋がやれやれというふうに私を見る。まるで幼い子を見るような生温かい視線は学生の頃から浴びてきたので、もはやなんの反論もない。

「それで、結愛がうんうんうなりながら理想を詰め込んだ高遠さんの家は、ここからは見えないの？」

「うーん、あの隙間からちょこつと屋根が見えるかな」

「結婚したら一緒に住むんでしょう？ 高遠さんもやるよねえ。大きな鳥籠つくつちやつてさ。それも本人の希望をいつばいつめ込んだものを結愛に自らつくらせたんだもん。そこから出ようなん

て思わないよね」

「鳥籠ほど小さくないよ、このお屋敷に比べれば小さいけど、それなりに大きいし」

「そういう意味じゃないって」

結婚したら一緒に住む……真尋に言われて、実はもう一緒に住んでいますなんて言えないから誤魔化してみた。

ちょうど茶葉が開いた頃合いを見計らって、カップに注ぐ。

紅茶の香りがふんわり広がって、小さなティールームを甘く包み込んだ。

「もうすぐね、結愛の誕生日」

「うん」

「二十歳で人生決めて……後悔しない？」

「むしろ遅いぐらい」

高校で知り合った真尋とは、少しずついろんなことを共有してきた。

お互い公にできないことも多くて、ゆっくりゆっくり互いの秘密を教え合ってきたのだ。

大学進学しないと決めた時も、真尋は『これから世界が広がっていくのいいの!? せめて付属の女子大ぐらい行こうよ』と言ってくれた。

私はイチゴがたっぷり飾られたケーキを口にする。甘すぎない生クリームとイチゴの酸味が溶け合う。ふわふわのスポンジも優しい舌触りだ。

うーん、やっぱり料理長のつくるケーキは最高だ。私ももっと頑張らなきゃなあって思う。

「そっか……結愛はずっと待っていたんだよね、二十歳になるの」

「うん、早く二十歳になりたかった」

「結愛、高遠さんのこと好き？」

「うん、好きだよ」

女の子は十六歳で結婚できるのに、駿くんはそうしなかった。

高校生がダメなら卒業してすぐでもよかったのに、それもしなかった。

『結愛が二十歳になるまで』

それを頑なに守ってきた。

駿くんと年の差に焦って、子どもであることがもどかしくて。でも、どうしたら近付けるかわからなかった。

『僕に恋をして、結愛』

駿くんの声がずっと耳に残っている。

二十歳の誕生日には私が駿くんに恋をしていると、今度こそ認めてもらいたい。



今日は私の二十歳の誕生日。

小さな頃は自分の誕生日は特別だった。

家族全員がそろって、母の手作りケーキをみんなで食べる。年の数の蠟燭を吹き消して、明かりがつくと「おめでとう」って言ってくれるみんなの声を今でも思い出す。

私も大きくなって、兄たちが就職してからは、集まらない日も仕方なく受け入れられるようになった。

代わりに、高校生になると両親と外食するようになった。

家を出て高遠家に来た去年は、お屋敷でみんなに祝ってもらった。

だから駿くんと二人きりで過ごす誕生日は今日が初めてだ。

「おはよう」より先に駿くんが「お誕生日おめでとう」と言ってくれた。

家族からは順番に電話がきたし、お屋敷の人たちも顔を合わせるとみんながお祝いしてくれた。今日ほど特別で、緊張する誕生日はないかもしれないと思うほど、朝からドキドキしている。

「二十歳の誕生日ですよ？ おめでとうございます」

清さんの手配で訪れたショップのスタッフが、服を渡しながら、お祝いの言葉を述べてくれる。

「ありがとうございます」

私は朝からエステに行ったりネイルをしてもらったりして、今は服を選んでもらい終わったところだ。下着やストッキングから始まり、どれもこれも少し背伸びしたような大人びたものがセレクトされた。私は戸惑いながらも素直に着せ替え人形になって、もうほとんどお任せ状態だ。

レースの綺麗な下着は肌触りがいいけれど、ちよつと恥ずかしい。さすがに自分でも無理だと思えるものは断ったけれど「せっかくのお誕生日ですから」と体のラインがあらわなワンピースを着せ

られている。

濃紺の生地で、前面に可憐な刺繍がほどこされていて、それがほんの少し体のラインを曖昧にしていた。スクエアネックで首元も大きく開いているし、下着がいいのもあって胸も綺麗な形になっている。太めのサテンのリボンが腰のくびれを強調しつつかわいらしさを滲ませる。

スカート丈は膝より十センチほど上で、普段着たことがない長さだ。すつきりとAラインで広がっているせいか足が細く見える。

髪はアップにして毛先をふんわり巻いている。

地毛がストレートで巻いた髪に憧れていたから、これはちよつと嬉しい。

最後にデコルテを飾るネックレスト、シルバーのヒールの靴とバッグで、仕上げてもらった。

「かわいらしいのに大人っぽくて、とってもお似合いですよ」

スタッフの人には褒めてもらえたけれど、自分では判断がつかない。

でも、駿くんの言うお姫様になれたならいいなと思った。

駿くんと私の年の差は十歳。

その差は永遠に埋まることはなくて、彼から見れば私はいつまで経っても子どもだろう。

ことあるごとに「二十歳になれば」と言われてきたせいで、二十歳はもつと大人だと思っていた。大人になれるのだと思っていた。

でもいざ今日二十歳の誕生日を迎えても、昨日とどう違うのかわからない。

「あ、お迎えの車がいらしたみたいです。今日着てこられたお洋服は、お宅にお届けしておきま

すね」

「ありがとうございます」

私は用意された車に乗って行き先も知らないまま連れていかれた。

街のほうへ行くのかなと思っていたのに、車はどんどん山の中に入っていく。

ビルが消えて、明かりが減ってきて、住宅街を抜けて、山への坂道を上<sup>のぼ</sup>っていくうちに、ほんのちよつとだけ、どこへ向かうのか不安になった。

同時に胸の奥深くに押し込めていた黒い塊<sup>かたまり</sup>が姿を現す。

私は矢内家の養女だ。そして婚約のきっかけは私の立場を守るためのものだった。

矢内家の養女でなければ、駿くんと出会うことも婚約することもなかったはずだ。

私自身にはきつとなんの価値もない。

高遠家の御曹司である駿くんに、ふさわしくないだろうことはずっと感じていた。

私へ与えられた「二十歳」という猶<sup>ゆうよ</sup>予<sup>よ</sup>は、駿くんにとつても猶<sup>ゆうよ</sup>予<sup>よ</sup>だったはず。

私がかここで「結婚しない」と言えば、駿くんは私から解放される。

私が「結婚したい」と言えば、駿くんはずつと私に縛られる。

駿くんが婚約解消しない理由は怖くて聞いたことがなかった。そしてそれをいいことに、私は駿くんに甘えて、気持ちをつづけてきた。

薄暗い道にひきずられるように、思考がマイナスになりかけて、私は首を左右に振った。

そんなこと、これまでだつてずつと悩んできたことだ。

駿くんを好きなら、彼のことを本気で想うなら、十歳も年下の私なんかじゃなく、もつとふさわしい人がいると言つて、早々に婚約解消すればよかったのだ。

それができなかつたのは、駿くんのが、どうしようもなく好きだったから。

そして駿くんが、嫌がることなくずつと私を大切にしてくれていたから。

ふつと明かりが降<sup>ふ</sup>り注<sup>そ</sup>ぐ。

薄闇に温かな明かりが広がって、私ははつとして顔を上げた。

坂道を右手に曲がって下つた先に、自宅のようなモダンな建物が見えた。入り口前の階段に駿くんが立つていて、その姿を見た私は一気に安堵<sup>あんど</sup>した。

駿くん、駿くん、駿くん!!

スポットライトの真下に立つて私を待っていた駿くんは、今朝仕事に向かつた時とは違うスーツ姿だった。わざわざ着替えてくれたんだって、すぐにわかる。

車のドアが開くと、駿くんが手を差し出した。飛びついてしまいたい衝動<sup>しょうどう</sup>を抑えて、私はその手に支えられて車を降りる。

駿くんが私を見てどう思うか知りたくて、ずつとその目を見つめていた。

「とても綺麗<sup>きれ</sup>になったね、結愛」

「……駿くん、おかしくない？」

「おかしくないよ。結愛はいつもかわいいけど、今夜は特にかわいい」

駿くんの甘い言葉に足元がふわふわ浮いているような気分になる。

「お姫様になれている?」

私は胸元で両手を合わせて、駿くんを見上げる。

「お姫様になりたい」。それが私の幼い頃の夢。

駿くんは私の質問の意図に気付いたのか、笑みを消して目を細める。

「ああ、僕だけのお姫様だ」

駿くんの言葉にほっと安堵していると、

「お姫様お手をどうぞ」

と言われる。

山の上のせいかひんやりとした空気が頬をなでた。私はちよつとだけ気取った仕草で、駿くんの手に自分の手を重ねた。手を繋いでゆるやかなスロープを歩く。

お店の人が扉を開けて待っていてくれて、私はお辞儀をして中に入った。

建物の入り口側から見える場所には細長い飾り窓しかなかったのに、反対側は壁一面がガラス張りになっていた。

窓の向こうには、山の下景色が広がっている。山の裾野には街の明かりがキラキラと光の模様を描いている。夜空の星も都会よりはつきりとその存在を主張して、空と地上の明かりが溶け合っているように見えた。

「すごい、綺麗……」

「この景色を気に入って、オーナーはここにお店を出したんだよ」

「辺鄙ですが、昼間の景色もどかで癒されるんですよ。どうぞこちらへ」

黒いエプロンを腰にまいた男性が、席に案内してくれる。

こげ茶色のテーブルが四つ並べられた空間は、シンプルでゆったりしていた。

白い壁にガラス窓、天井に一部だけ木が張られている。

明るさを抑えた照明の下のテーブルは小さなキャンドルがひとつ灯されていた。銀色のフォークとナイフと白いナフキンが並べられているのもそこだけ。他はガラスの器に一輪ずつ違う花が飾られている。

「貸し切りにしたわけじゃないんだけど、ここは一日に迎えるお客を十人って決めている。今日はほとんどがランチにきて、夜が僕たちだけだったらしい」

私の視線に気付いて駿くんが先に説明する。

私たちは外の景色が見えるように、四角いテーブルの角に隣り合って座った。

右手の奥にはカウンターをはさんで厨房がわずかに見える。外観通り、個人の家の夕食に招待されたような雰囲気があった。

お客様は私たち二人だけだとわかって、少し緊張が解ける。

「結愛、せっかくだからアルコール呑んでみる?」

「いいの?」

「どれぐらい呑めるかわからないから、軽めの物を少しだけね」

「うん!」

アルコールは初めてだ。なんだか急に大人になったことを実感する。お酒もタバコも解禁、選挙権もある、国民年金も支払って、親の承諾を得ずとも結婚ができる年齢。

駿くんはシャンパンをもらって、私は白桃のカクテルをもらった。

「結愛、誕生日おめでとう」

「ありがとう」

お料理は小さなポーシヨンがいくつも運ばれるスタイルだった。

地元の野菜を使い、その旨味を最大限に引き出す調理法で料理を作っているのだと、出されるたびに説明してもらった。

ショートグラスに入れられた白身魚のお刺身は、最後にお出汁を使ったスープを入れていただいた。ふわふわの泡の蟹のクリームが添えられたスフレだとか、フォアグラを薄いカプで包んでハーブと組み合わせたものだとか、和食とも洋食ともつかない創作料理だ。

私はさつきから「おいしい」と「かわいい」を連発している。

白桃のカクテルは桃の甘みと、とろりとした感触でまるでジュースのようで、けれど時間とともにじんわりとお腹が温まったような気がする。

「この間、真尋が清さんのサロンにきて、あ、真尋って高校からの友達で」

「ああ、結愛のメールでもよく名前が出ていた子だね。清さんのサロンに入れるなんて見込みがあるな」

「真尋も言っていたけど、清さんのサロンってそんなに特別な？」

駿くんの手にはいつものまにか白ワインのグラスがある。駿くんはいつもより饒舌な私の話をにこしながら聞いてくれていた。

「清さんは、僕の曾祖母からすべてを学んだ人だからな……厳しい人の指導に耐えたから、清さんも妥協を許さないだろう？ 教えるからにはきちんと身に着けてほしい。だから学びたいという意欲のある人を優先させているだけだとは思うけど。清さんのサロンの最初の生徒は結愛なんだから、わかるだろう？」

「どうかな？ 私は清さんに遊び相手してもらいながらだったし、お手伝いさせてもらっていただけだから」

「清さんは結愛が小さい時から、日常に組み込んでいろいろ教えてきたからね」

駿くんが海外留学して、彼のご両親も仕事の関係で海外を転々とするようになって、私は週に二回以上は高遠家に通っていた。お屋敷の人たちは私をかわいがってくれたし、小学生だった私のしつけしてくれたのは清さんだ。

そして、駿くんの曾祖母である大奥様。

大奥様も居場所を転々とする人で、気が向くとふらりと高遠家のお屋敷に戻ってきて、数日、もしくは数週間滞在していた。

日本の田舎に住んでいたこともあれば、海外の別荘にこもっていたこともあるし、世界一周の船

旅をしていたこともあった。

遊びに行っている時に帰ってくると、滞在先や旅行先の土産話をたくさん聞かせてくれたり、お茶やお花の指導をしてくれたりもした。晩年は体調を崩して入院していたけれど、自由気ままに生きていく人だった。

「次はお水にしよう、結愛。これ以上は呑まないほうがいい」

「うん、そうする」

ここは料理人であるオーナーと、ソムリエ兼給仕担当の二人しかいないのだそう。

趣向をこらした料理を提供できる人数も、対応できる人数も限られているから、一日十人限定なのだ。温かい家庭的な雰囲気の中でいただく駿くんと二人だけの食事と、初めてのアルコールで私はすっかりリラックスしていた。

メインのお肉料理が終わると、照明の明かりがさらに落とされる。

そして運ばれてきたのは小さなケーキ。

生クリームにイチゴが飾られたそれは、シンプルだけど私が一番好きなケーキだ。

細長い二本の蝋燭が私たち二人の顔を照らし出す。お皿にはハッピーバースデーの文字。

「二十歳の誕生日おめでとう、結愛」

今日一日、いろんな人に何度となく言われ続けた言葉。駿くんには朝にも言ってもらった。

でも今ほど実感した瞬間はない。

やっと、やっと二十歳になった。

ずっと子どもで、年の差は永遠に縮まらなくて、駿くんにとっては今でも子どもに見えるかもしれない。

でも駿くんと約束した「二十歳」だ。

「ありがとう、駿くん」

私はふうつと蝋燭の火を吹き消したけれど、照明は仄かに落とされたままだった。

テーブルの小さなキャンドルだけが淡く辺りを照らす。

しんと静まって初めて、室内にはずっとピアノの音が流れていたことに気が付いた。

煙が細く流れるそばに、駿くんが小さな箱を置く。

「結愛は今日二十歳になった。二十歳になったら、結愛の気持ちを聞かせてほしいって伝えていたよね？」

私はすつと背筋を伸ばして、お誕生日のケーキと小さなプレゼントらしき箱と、そして駿くんへと順に視線をうつした。

キャンドルの炎が揺らめいて、駿くんの表情にも影と光が重なる。

「結愛、僕と結婚してほしい」

どくんつと心臓が鳴った。

私たちが婚約を交わして十五年。二十歳になったらとずっと言われていたけれど、これほどすぐに結婚の二文字が出るとは思ってはいなかった。

なにより……駿くんから言われるとは思っていなかった。

私が「好きです」って言って、「結婚したい」って言って。

駿くんは「いいよ」って返事をするだけだと思っていた。

だから、今ので十分。これ以上の言葉を求めるのは分不相応かもしれない。

でも私には、それよりもっと欲しい言葉がある。

膝の上の手をぎゅっと握りしめて、私は駿くんを見つめた。

私の「好き」がきちんと伝わるように。

兄としてじゃない、家族としてじゃない、親愛の情ではなくきちんと「恋」をしているのだと、駿くんにはわかってほしいから。

「駿くん。私は駿くんが好き。ずっと長く婚約者だったからとか、そんなの関係なく一人の男の人として好き」

恥ずかしくて、視線を伏せなくなるのを堪える。駿くんもまたまっすぐに私を見る。

「駿くんこそ、私のこと一人の女の子として好きですか？」

駿くんの気持ちをずっと知りたかった。

十五歳で五歳の女の子と婚約させられた駿くん。

私は心の中で何度も問うてきた。

そのせいで駿くんの人生は私に縛られたんじゃないか。

私を守るために駿くんは犠牲になっただんじゃないか。

永遠に縮まらない十歳の年齢。

私は二十歳になってもまだ子どもで、大人の駿くんにはいつまでも追い付けない。

車の中でも考えていた不安が、この期に及んで一気に噴出してきて泣きたくなる。

「結愛……君と婚約した時、君は五歳でなにもわからなかっただろうけれど、僕は十五歳だ。その意味も理解していたし、自分で納得して決めた。確かに最初は婚約と言っても時間が経てば、解消される程度のものだと思っていたこともある。なにより君が望めば、僕はいつでも解消するつもりだった。さすがに小・中学生だった君をそういう目で見るのは憚られた」

駿くんの言うことはわかっている。

私は五歳、駿くんは十五歳、私が十歳の時にはすでに成人していた。

恋愛対象として見ないほうが当たり前だ。

私たちの婚約はどこまでも曖昧だった。

「でもあの時……結愛が十六歳のあの時、初めて君を意識した。最初から君は僕にとって妹じゃない、一人の女の子だったけど、あの日からずっとそういうふうにしか見ていない」

駿くんが、私が十六歳の時に意識したと言ってくれたことが嬉しかった。

私も同じ。

一番悲しかった時に駿くんが一番に相談に行つて慰められて、私も一人の男性として意識した。お互いあの時に、恋が始まったのかもしれない。

「結愛が好きだ」

「……………」

初めて、駿くんが「好き」だと言葉にしてくれる。

はつきり言葉にされるまで自信がなかった。

目に溜<sup>た</sup>まつていた涙が、ふわりと落ちた。

「本当はずっと口にしたかった。君が僕を慕<sup>した</sup>ってくるたびに、好意を示されるたびに、約束なんて放棄<sup>ほうき</sup>して、気持ちを伝えたかった。でも同じぐらい君の意思も尊重<sup>そんじゆう</sup>したかった。五歳で婚約<sup>こんやく</sup>したせいで、刷<sup>す</sup>り込みのように生まれた僕への好意が、どう変化<sup>へんか</sup>していこうと許さなきゃいけないって」  
駿くんの手が伸びて、私の濡<sup>ぬ</sup>れた頬<sup>ほ</sup>をぬぐう。

切なく揺れる駿くんの視線に、彼<sup>が</sup>はずっと私を見守<sup>まも</sup>ってくれていたのだと今更<sup>いま</sup>ながらに感じる。

「本当は二十歳で結論<sup>けつろん</sup>を出させるのも酷<sup>こ</sup>なことだと思<sup>おも</sup>っている。君の世界はこれから広がって新たな出会いもあるはずなのに、僕はこれ以上待つことはできないんだ。結愛<sup>けあい</sup>がもしこの指輪<sup>ゆびわ</sup>を受け取<sup>と</sup>って、僕との結婚<sup>けっこん</sup>を望<sup>のぞ</sup>んでくれたら、僕はもう待<sup>まち</sup>たないし逃<sup>に</sup>がさない。だから……嫌<sup>きら</sup>だったらきちんと断<sup>ことわ</sup>って。今なら僕は君を手放<sup>て</sup>せる」

私はテーブルに置<sup>お</sup>かれたプレゼントのリボンをほどいた。

駿くん到手<sup>て</sup>放<sup>はな</sup>せるって言<sup>い</sup>われて、嫌<sup>きら</sup>だと思<sup>おも</sup>ったから。

断<sup>ことわ</sup>るなんてそんなこと一度<sup>いちど</sup>も思<sup>おも</sup>ったことない！

グリーンがかつた革<sup>かわ</sup>のケースを開<sup>あ</sup>くと、ダイヤの指輪<sup>ゆびわ</sup>が入<sup>い</sup>っていた。

私はそれを駿<sup>しん</sup>くんに渡<sup>わた</sup>す。

「駿<sup>しん</sup>くん、はめて。私は駿<sup>しん</sup>くんが好き。駿<sup>しん</sup>くんと結<sup>むす</sup>婚<sup>こん</sup>したい。手放<sup>て</sup>せるなんて言<sup>い</sup>わないで。ずっと

駿<sup>しん</sup>くん縛<sup>しば</sup>り付けてよ！」

駿<sup>しん</sup>くんが指輪<sup>ゆびわ</sup>をそっとつまみ上げた。

そして、私が差し出した左手<sup>ひだりて</sup>を恐<sup>おそ</sup>る恐<sup>おそ</sup>るといった感じ<sup>かんじ</sup>で支<sup>た</sup>える。

額<sup>ぬく</sup>にかかる髪<sup>かみ</sup>、わずかに伏<sup>ふ</sup>せられた目<sup>め</sup>、私たちだけ<sup>ただ</sup>を淡<sup>たん</sup>く浮<sup>う</sup>かび上がらせるキャンドルの明<sup>あ</sup>かりは、駿<sup>しん</sup>くんを見<sup>み</sup>知らぬ男性<sup>おとこ</sup>に見<sup>み</sup>せた。

「結<sup>むす</sup>愛<sup>あい</sup>……僕の隣<sup>となり</sup>に立<sup>た</sup>って表<sup>おもて</sup>に出<sup>で</sup>るようになれば、君<sup>きみ</sup>は傷<sup>や</sup>付<sup>つ</sup>くことも増<sup>ま</sup>えるだろう。今まで隠<sup>かく</sup>してきたことも白日<sup>はくじつ</sup>の下<sup>もと</sup>にさらされるかもしれない。それでも、僕<sup>ぼく</sup>と結<sup>むす</sup>婚<sup>こん</sup>する？ 指輪<sup>ゆびわ</sup>をはめても構<sup>かま</sup>わない？」

駿<sup>しん</sup>くんらしくない硬<sup>かた</sup>い声<sup>こゑ</sup>が、二人<sup>ふたり</sup>きりの店<sup>みせ</sup>内に静<sup>しず</sup>かに響<sup>ひび</sup>いた。

その目は私<sup>わたし</sup>に覚<sup>さ</sup>悟<sup>ご</sup>を強<sup>つよ</sup>いことを躊<sup>ため</sup>躇<sup>ち</sup>うように揺<sup>ゆ</sup>らいでいる。

ずっと大人の駿<sup>しん</sup>くんが、少し幼<sup>こ</sup>く見<sup>み</sup>えた瞬間<sup>しゅんかん</sup>。

「私<sup>わたし</sup>を駿<sup>しん</sup>くんの、駿<sup>しん</sup>くんだけのお姫<sup>おひめ</sup>様<sup>さま</sup>にして」

「結<sup>むす</sup>愛<sup>あい</sup>は永遠<sup>えいゑん</sup>に僕<sup>ぼく</sup>のお姫<sup>おひめ</sup>様<sup>さま</sup>だ。結<sup>むす</sup>愛<sup>あい</sup>……好き<sup>すき</sup>だよ」

「駿<sup>しん</sup>くん、好き<sup>すき</sup>、好き<sup>すき</sup>」

溢<sup>あふ</sup>れる気持<sup>きもち</sup>ちを言葉<sup>ことば</sup>にのせる。指<sup>ゆび</sup>先<sup>さき</sup>に指輪<sup>ゆびわ</sup>がかかって、ゆつくりと左手<sup>ひだりて</sup>の薬指<sup>くすりゆび</sup>にはま<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>っていくのを見<sup>み</sup>ながら、私<sup>わたし</sup>は覚<sup>さ</sup>悟<sup>ご</sup>を決<sup>け</sup>めた。

なにがあっても駿<sup>しん</sup>くんと一緒<sup>いっしょ</sup>に生きていく。



お腹がいっぱいなのもあってケーキは持って帰ることにした。紅茶と小さなお菓子をいただいたあと、駿くんがおもむろに切り出す。

「結愛に選択肢を与えてあげる。このまま家に帰るか、ホテルへ泊まるか」

「ホテル？」

「覚悟ができていないなら、家へ帰る。大丈夫ならホテルへ行く」

駿くんの言葉の意味がわからないほど子どもじゃない。

一緒に暮らし始めても、互いに個室があるから寝る時は別々に寝ていた。このまま家に帰れば、私に「そういう覚悟」ができるまで、駿くんは見逃してくれるつもりなんだろう。

駿くんは何度も際どい雰囲気を出しながら私を意識させてきたくせに、どこかで頑なに一線をひいていた。

覚悟がないのは、むしろ駿くんのほうなんじゃないだろうか。

私が悩んでいたように、駿くんは駿くん悩んでいたのだと、今夜彼の気持ちを聞いて知った。

二十歳で人生を決めさせることに、駿くんは戸惑っている。

二十歳になったばかりの私に、本当に触れていいか迷っている。

「覚悟できているよ、ホテル行きたい」

私と言うと、駿くんは、はあつとため息をつく。

「結愛はわかってない」

「なにが？」

「一度触れば止まらない。兄のように優しくはできない」

「駿くんは兄じゃない」

言い返せば、駿くんはあきれたように私を睨む。

「そうだった。結愛は妹じゃないし……時々無性に性質が悪いんだ。猶予がいらぬ、なんて言うから、お屋敷に戻せなくなつたし。一緒に暮らせば、どうしても触りたくなるし。約束だけは破りたくないから、我慢させられるし。なのに本人は無邪気だ」

「私だって我慢したよ」

「あれだけ僕を誘惑しておきながら？」

誘惑したのは駿くんのほうだ。

毎日のように私を抱きしめて、唇以外の場所にたくさんキスをして、勝手に体を目覚めさせた。

「私を、駿くんのものにして」

言った瞬間、自分が放つた言葉の意味に気付いて、私は恥ずかしくなって両手で頬を包んだ。

なんてことを口走つたんだろう。

案の定、駿くんは呆気に取られて私を見ると、その後につこりと綺麗に笑った。

私に時々見せるようになった、男としての表情。

「君のすべてを僕のものにする」  
駿くんは私の耳元でささやき、私の腕を掴んだ。  
左手の薬指に結婚の証をはめた私の手が、駿くんの大きな手に包み込まれた。



連れてこられたのは数年前にできたばかりの外資系のホテル。  
タクシーで向かう間に、駿くんは清さんに連絡をして、私たちの荷物をホテルに届けるように頼んでいた。

それだけで、彼らにいろんな意味が伝わった気がして私はいたまれなくなつた。  
次に高遠のお屋敷に戻った時、きっと私の世界はこれまでとは違うのだろう。

鳥のひなのように駿くんのあとをついてまわつて、お屋敷のみんなにかわいがられてきた。  
私は駿くんだけを見ていればよかつたけれど、これからは駿くんが見るものを隣で見ることになる。

ホテルのエレベーターに乗つて、最上階のお部屋に通されると、お屋敷とは雰囲気の違いとても豪華な部屋が広がっていた。

大きなソファが鎮座するリビング。その隣は飾り棚で仕切られたダイニング。そして扉の向こうにベッドルームが見える。カーテンやクッションなど、臙脂と紫色がアクセントになつた部屋は

シックで大人っぽい。  
壁一面はガラス張りで、さっきのレストランから見た景色とは違う、華やかな夜景が眼下に広がっていた。  
リビングテーブルの上には、ワインやフルーツの盛り合わせ、そしてバラの花束が置いてある。

もし私が家に戻ると言っていたら、これらは全部無駄になつたんだろうか。  
仕事の忙しい駿くんが、私のためにいろいろ考えてくれたんだと思うだけで、なんだか泣きそうになる。

私は、バラの花束を手にして香りを嗅いだ。赤や黄色やピンクの色合いは鮮やかでとてもかわいらしい。  
今までも駿くんにはたくさんのプレゼントをもらってきた。

くまのぬいぐるみ。綺麗なヘアアクセサリー。洋服にサンダル。時にはバッグも。

高校生になると、腕時計やブレスレット、ペンダントなど身に着けるものが増えて、そして今夜指輪をもらった。

「駿くん、ありがとう。すごく素敵なお部屋」

「結愛はお屋敷のほうがお気に入りだろうけどね、今夜ぐらいいいだろう？」

「お屋敷も……あの家も大好き」

駿くんが建てた家。そして私の希望が詰まった家。

駿くんは私から花束を取ると元の場所に戻す。